

1. はじめに

食用ナバナの業務向け出荷は、収穫物が軽量であり、出荷作業が容易であることから、拡大傾向にある。しかし、現行品種の‘寒咲21号’は障害花の発生などにより収量性が低く、安定した収量の確保が課題となっている。そこで、本研究では、収量性の高い品種選定を目的に、現行品種を含めた4品種の播種時期別の収量および規格外品の発生程度について調査した。

2. 材料および方法

供試品種として‘CR花かんざし’（丸種種苗）、‘CR華の舞’（丸種種苗）、‘CR栄華’（サカタのタネ）の3品種に加え、対照品種として‘寒咲21号’（サカタのタネ）の計4品種を用いた。播種は2016年9月2日（定植日：9月26日）、9月7日（定植日：9月30日）、9月12日（定植日：10月15日）に行った。畝幅135cm、株間30cmの千鳥植え（5,128株/10a）とし、元肥としてN-P-K=17-21-16kg/10a、追肥は定植30日後から2~3週間隔でN-P-K=2-0-2.6kg/10aを施用した。収穫は2016年11月25日から開始し、2017年3月24日に終了した。

3. 結果

1) 規格品収量

規格品収量は‘CR栄華’の「9月12日播種」が最も多く、次いで、‘CR華の舞’の「9月7日播種」であった（図1）。また、全ての播種時期において‘寒咲21号’で最も少なくなった

（図1）。また、‘CR栄華’および‘CR花かんざし’では播種時期を遅らせるほど収量が多くなる傾向がみられた。

2) 規格外品の発生

障害花の発生による規格外品は、全ての播種時期で‘寒咲21号’が多くなった（図2）。

‘寒咲21号’では、花蕾の白化（図3）および花蕾の腐敗（図4）が多くみられた。‘CR花かんざし’ではアントシアン着色花の発生はほとんどみられなかった。‘CR栄華’ではアントシアン着色花が多くみられたが、花蕾の腐敗はほとんどみられなかった。‘CR華の舞’は最も規格外品の発生が少なかった。

4. おわりに

以上のことから、収量性に優れた‘CR栄華’や、障害花の発生が少ない‘CR華の舞’が有望品種であると考えられた。

今後、作柄の年次変動や、更に播種時期を遅らせた際の収量への影響を調査し、有望品種の選定を行う。更に、栽植密度の検討や現場での栽培試験などを行い、ナバナの安定生産技術の開発を進めていく。

（栽培部 橋本真明）

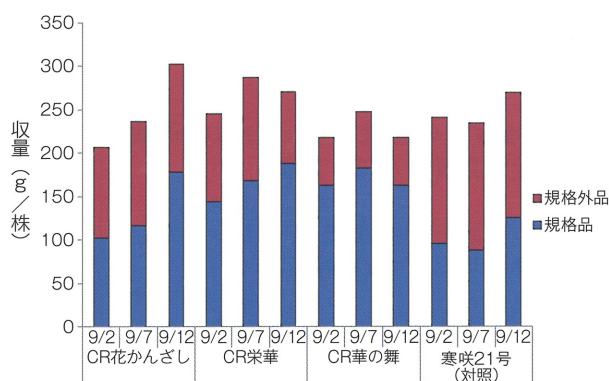


図1 播種時期別の収量

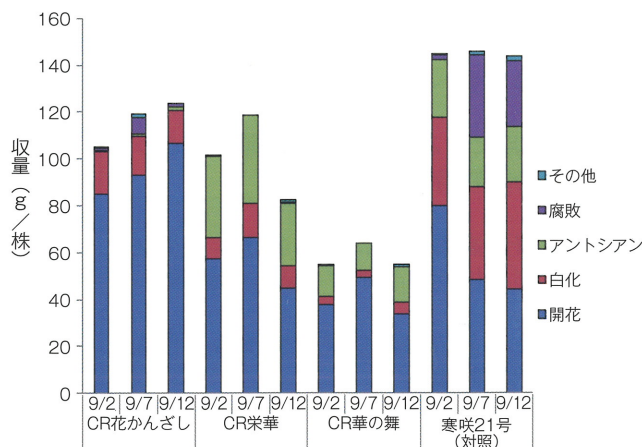


図2 播種時期別の規格外品発生内訳



図3 花蕾の白化



図4 花蕾の腐敗